設楽発掘通信

No.29
平成２９年
７月号

大畑遺跡で石囲炉のある縄文時代中期の竪穴建物跡を検出

川向地区にある大畑遺跡では、遺跡南東部の尾根筋（標高約四二五～四三五メートル）での発掘調査が進行中です。先ほど、この尾根筋で縄文時代中期と考えられる竪穴建物跡が検出されました。

建物跡は二棟分がほぼ同じ地点で重なっており、上の建物跡が一辺約二・一メートルの正方形、下の建物跡が長径約三・九メートルの五角形に近い平面形をしています。いずれの埋土からもごく少量ですが、縄文土器片や剥片石器が出土しています。また床面近くでは、多量の炭化物が広がっています。

今回、注目されるのは、下の竪穴建物跡の床面で石囲炉が検出されたことです。これは、掘り込まれた穴の壁面に板状の礫を立てて一辺約六〇～七〇センチメートルの箱形としたものです。礫の表面は熱を受けて赤く変色しています。

このような石囲炉のある竪穴建物跡は、大畑遺跡の南西側に所在する川向東貝津遺跡で四棟が検出され、北西側に所在する大栗遺跡でも一棟が検出されています。いずれの遺跡も、川に面した段丘面に立地しています。これに対して大畑遺跡の竪穴建物跡は、尾根筋という比較的高くて平場の少ない地形に立地しています。そのためか、建物跡の大きさは一回り小さいのですが、石囲炉の大きさはあまり変わりません。このことから、家屋の中に占める炉の位置づけを考えるうえで重要な資料であり、今後も検討を深めていきたいと考えています。

（愛知県埋蔵文化財センター　永井邦仁）

大畑遺跡で見つかった竪穴建物跡の石囲炉

大畑遺跡で見つかった
竪穴建物跡の位置

大畑遺跡の調査

大畑遺跡の発掘調査が始まって早くも二ヶ月が経過しようとしています。現在は、約一万四千㎡と広大な調査範囲について、前号でも紹介しました調査区中央に想定される南北方向に走る谷部を境に、概ね東半分（A・B区）の調査を進めています。経過は順調で、天候に恵まれたこと、作業員さんの頑張りのおかげで、日々新たな遺構や遺物が見つかっています。

上の写真は遺構検出の作業風景ですが、斜面を上から下に向かって、作業員さん達が並んで地面を削っています。そこから土の違いを見きわめて、遺構を探していくのは前号でもご紹介したとおりです。地面に現れる土の違いを囲って、遺構として認定していきますが、必ずしもすべてが昔の人が遺した痕跡とは限りません。下の写真は、休憩中、その場を離れていた隙にモグラが通っていった跡です。このような生物が遺した攪乱、植林されていた木々の根っこによる攪乱など、いわゆる植生痕も地中には無数に遺されており、これらの中から昔の人々が遺した生活の痕跡を見つけ出すことが発掘調査の難しい点であると同時に、楽しみの一つと言えるでしょう。

遺構検出作業風景（南東から）

モグラが通った痕跡（西から）

遺構検出作業時、木の根に抱かれるように土器や石器等の遺物が見つかる例が散見されました。斜面の埋没過程で、土と一緒に上から下へ移動する際に、木の根付近で引っかかるようにとどまったものと推測されます。そのような形で少しずつではありますが、遺物の出土量も増えてきました。

写真に載せたのは縄文土器（上）と灰釉陶器（下）です。縄文土器はその名の通り縄文時代の土器、灰釉陶器は平安時代（九世紀後葉）頃の土器で、同じ土器でも色調に違いが認められます。これは焼成技術の違いに起因するもので、縄文時代の土器は、平地やくぼ地にて野焼きで焼成されます。その時の温度は約六百～八百度と言われ、酸化焼成されることから赤い色調に焼き上がります。それに対して灰釉陶器は、古墳時代に日本に伝わった須恵器と同じ焼成技術で、窖窯と呼ばれる地下式の窯で酸素が供給されない状態で還元焼成されるため、白～灰色の色調に焼き上がります。その時の温度は千百度以上と言われ、野焼きに比べとても高温になり、硬質に焼き上がります。

土器は、その形や厚み、文様のつけ方、あるいは高台の形など、時代や地域ごとの特徴を盛り込んで形作られています。考古学では、それらの特徴の微妙な変化の一つ一つを手掛かりに、時期を計る精緻な物差し（編年）が作られており、それが出土した遺構の時期を決定する際の手掛かりにもなります。

これらの遺物が見つかったということは、周辺に当時の人々が生活していた可能性を示しており、それぞれの時代の遺構が見つかる期待が膨らんでいきます。次号以降にご期待ください。

（株式会社二友組　鷺坂有吾）

出土した縄文土器（南から）

出土した灰釉陶器（南から）

発掘調査で働く人びと ― 測量士 ―

遺跡の発掘現場は、様々な業種の人たちが、それぞれの役割を果たしながら協力しあうことで成り立っています。今回は『測量士』の仕事を紹介します。

通常、測量と言えば、建築現場や工事現場等で活躍する姿を想像しますが、遺跡の発掘においても、とても重要な役割を果たします。遺跡から発見される遺構や遺物は、そのモノ自体も重要ですが、それがどこから出土したものか、という位置情報がとても重要になってきます。いくら状態の良い石器や土器も、位置情報がなくては考古学的な価値は半減すると言ってよいでしょう。

そこで発掘調査においては、国家資格を有する測量士が、世界測地系と呼ばれる公共座標に準じて、調査区の位置・地形・遺構・遺物の一つ一つを測量し、平面的な位置と高さをデータ化して、最終的な図面としてまとめる作業を担当しています。

弊社の行う測量作業では、自動追尾光波測距儀というシステムを利用しています。世の中の多くの測量作業と同様に、測量対象上に立てたプリズムの位置を、写真奥に設置されている機械（光波測距儀）で測定していきますが、自動追尾システムでは、機械とパソコンを送受信機を介して連動させ、機械の操作をパソコンで行っています。

一昔前の発掘現場で測量と言えば、二人がかりでポールと巻き尺を用いて測り、図もその場で描いていくのが当然でしたし、現在でもそのような手段で測量を行っている調査もあります。しかしながら自動追尾システムを導入することで、測量士は一人で作業を行うことができ、より効率的かつ正確な作業を行うことができるようになりました。（株式会社二友組　鷺坂有吾）

測量作業風景

マサノ沢遺跡の調査

マサノ沢遺跡の調査は、七月初頭から準備作業に着手しました。発掘現場の準備は、まず工事現場と同じようなフェンスの設置から始まります（写真）。フェンスを設置する目的はいろいろありますが、最も大きな目的は、安全のためです。発掘調査の現場は、工事現場と比べると危険が少ないように思われている方も多いかもしれません。しかし、掘削に使う重機も動いていますし、思わぬ段差が各所にあったりして、現場を詳しく知らない人が不用意に立ち入ると、大きなけがにもつながります。ですから、関係者以外の方が誤って立ち入らないよう現場をフェンスで囲ってから作業を開始します。

フェンスの設置が終わったら、休憩用のハウスや重機、その他の資材を搬入します。そのあとは、いよいよ発掘調査が始まります。

現在は表土掘削を行っています。表土掘削は、あまり遺物を含まない新しい堆積を重機で掘削していく作業です。掘り過ぎてしまうと、遺構を壊してしまうため、慎重に行います。そして、まもなく作業員さんによる本格的な調査に突入していきます。前号でもお伝えした通り、マサノ沢遺跡では、範囲確認調査ですでに石囲炉の存在を確認しているなど、大きな成果が期待されています。今後の報告を楽しみにしてください。

（株式会社二友組　岩瀬大輔）

フェンス設置作業

発掘調査で働く人びと

―発掘作業員さん―

設楽ダム事業に伴う発掘調査が本格的に始まってから四年目を迎えました。現在は約五〇人の発掘作業員さんのご協力で調査が進められています。ところで、どのような方々が発掘作業員さんとして実際に働いているのでしょうか？そこで、今回は発掘調査に従事されている方々の身の上を調べてみました。

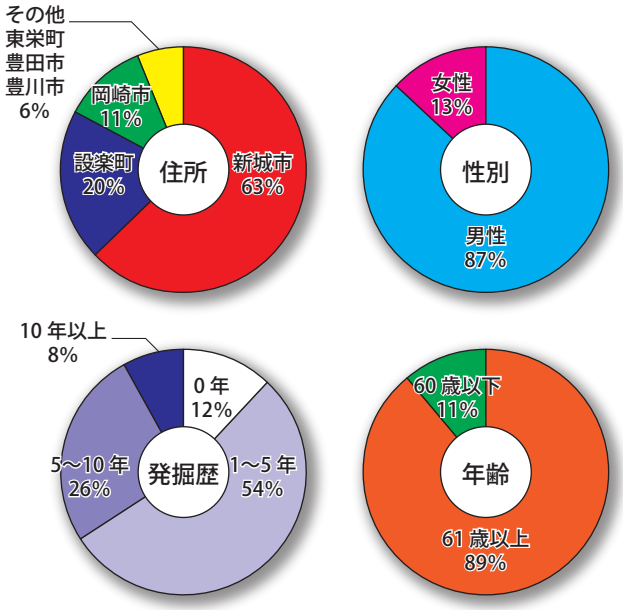
性別は男性が八七％、女性が一三％、年齢は六〇代以上が八九％、五〇代以下が一一％で、やはり六〇代以上の男性が圧倒的に多いようです。住所はお隣の新城市が六三％で最も多く、設楽町の二〇％がそれに続きます。それに加えて、やや遠い岡崎市からも一一％、その他、東栄町、豊田市、豊川市から参加されている方もいます。約八割の方が地理上の豊川上流域、あるいは歴史上の旧設楽郡域にお住まいといったところでしょうか。最後に発掘歴です。半数以上の五四％の方は「一～五年」で、設楽ダム事業に伴う発掘調査が始まってから参加された方だと思われます。「一年未満」のルーキーは一二％、「五年～一〇年」のベテランは二六％、八％の「一〇年以上」の方は発掘の「猛者（もさ）」、レジェンドといったところでしょうか。

このようなメンバーですが、日々、設楽町あるいは愛知県、いやいや日本の歴史を塗り替えるような大発見を夢見て？大畑遺跡で奮闘中です。和気あいあいと汗を流して頑張っている発掘作業員さんたちを今後とも温かく見守ってください。

（愛知県埋蔵文化財センター　早野浩二（はやのこうじ））

遺構の掘削

斜面での検出作業



設楽発掘通信 No.29
平成29年7月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話 （0567）67-4161【管理課】 4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　株式会社 二友組